福崎町文化

第36号　令和2年3月19日　兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1 福崎町文化センター発行

浦の島子　松岡映丘画
福崎町立柳田國男・松岡家記念館 蔵

兄たちが見た松岡映丘

石井正己

一『故郷七十年』が語る松岡映丘

今では普通になった松岡五兄弟という言い方が定着したのは、そう古いことではない。一九九二年秋に姫路文学館で企画展「松岡五兄弟展」が開催されたときからだった。この時には松岡五兄弟の関連資料約二〇〇点が集められ、その人生や業績が紹介された。その時に発行された図録は、今でも五兄弟を把握し、比較するための基本資料になっている。

柳田國男・松岡家記念館では、五兄弟の業績の顕彰を始めた。柳田國男は広く知られるので、他の四人に焦点をあてている。二〇一五年は「松岡鼎展～柳田國男を導いた兄～」、二〇一六年は「井上通泰展～歌を詠み愛した眼科医～」、二〇一八年は「松岡静雄展～南洋に魅せられた海軍大佐～」、二〇一九年は「松岡映丘画稿展 やまと絵でみる平家物語の世界」を開催し、それぞれ図録を発行した。

昨秋、歴史民俗資料館で「日本画家・松岡映丘の業績」の講演をした。ちょうどよい機会なので、そのときの内容を再構成し、町民のみなさまをはじめ多くの方々に、その業績を知っていただく一助になればと考えた。明治時代になって西洋文化が導入され、絵画の世界でも西洋画が勢力を拡大していった。そうした時代の流れにあらがうように、映丘は伝統的な大和絵の再興に人生を賭けたと言っていい。

柳田國男が神戸新聞社の要請によって語った『故郷七十年』（のじぎく文庫、一九五九年）は、時代の貴重な証言集である。同時に、五兄弟で最も長生きしたので、松岡家の歴史も語っている。その中でしか知られないエピソードも多く、書かれた文章にはないおもしろさがある。兄が語った『故郷七十年』を通して、そこからうかがい知ることのできる松岡映丘の人生をたどってみる。

映丘は一八八一年七月、父操、母たけの八男として生まれた。「母の思い出に」に書かれる、板垣退助遭難の時代の次の事件は、翌年の出来事だった。若い酔狂人が門前に大の字になって「自由の権だい」と何遍か高く唱え、それが自由という語を学んだ最初だったという。國男七歳のときの事件だが、「それから今日まで此語はきらいである」というので、心に深く刻まれたことが知られる。映丘は国民の参政権の確立をめざした自由民権運動が勃興する時代に生を受けたのである。

一八八四年、四歳のとき、映丘は北条に移っているので、辻川時代の思い出はかすかであろう。「東京の印象など」には、辻川と東京でのことが見える。辻川の旅館「ます屋」は人力車の立場になっていたので、三人の兄弟はそこに来て休む人力車の背後に描かれた武者絵を鑑賞するために、毎日のように通った。一八八七年、國男は兄の通泰に導かれて上京し、本郷の絵草紙屋で錦絵を買っては映丘に送ってやった。弟の絵心を刺激したのである。

ついでに、映丘という雅号の由来に触れる。それは本名の輝夫にちなんで兄の通泰が付けたものだった。映丘の二文字は古い文学にもあり、映丘を「オニテル」と読めることから付けたもので、「エイキュウ」と音で訓まれることは覚悟の上であった。映丘は一八九九年、一九歳で東京美術学校に入学し、一九〇四年、二四歳のときに主席で卒業した。この雅号が生まれた時期は不明だが、一九一二年の第六回文展出品作「宇治の宮の姫君たち」が早い例だろうか。

映丘は一八九一年に上京するが、「北斎漫画のことなど」で、國男は布川時代に映丘と一緒に『北斎漫画』を見たという。後述する通泰の「少年時代の輝夫」では通泰の家に来てからのこととする。通泰が『北斎漫画』を買い与えると、小学校から帰ってきた映丘は本を開いては中の絵を熱心に描いていた。通泰の記憶が確かだとすれば、御徒町時代の出来事になる。「柳井子の弟」では、映丘は母のたけにくっついている秘蔵っ子で、小学校では自分の好きな子ばかり集めて遊んでいたという。

さらに「末弟松岡映丘」では、映丘が兄の通泰の縁で日本画家の橋本雅邦に師事したことに触れる。一八九五年、一五歳のときのことである。二年後には雅邦のもとを去り、大和絵の大家・山名貫義に師事する。國男はそれを、「松岡流の、何か人と違うことをしようという気持があったからであろう」と推測している。

さらに新進の日本画家・小堀鞆音（とも と）につき、東京美術学校を受験した。この変更を貫義の死去と見ているが、その死は東京美術学校入学後なので、誤解があると思われる。

そして、「末弟松岡映丘」では、映丘が一九三八年に五八歳で亡くなったことを惜しむ。日本画を描くときの姿勢が健康に障ったことや風景画を試みたことは、後述するように、追悼以来の話題であった。いろいろな標本や手本を拵えていたが、戦災で焼けてしまった。外遊してイタリアの名画を見て日本画と比較していたが、著書はわずかで、美術論をまとめるまでには至らなかった。理屈は言わなかったし、作品も多くなかったので、今のうちは弟子がいるが、後世まで名前が残るかどうかはわからないと見る。映丘の業績を今日につなぐ発言として注目される。

二　兄・井上通泰が偲ぶ松岡映丘

一九三八年三月、松岡映丘が亡くなった後、追悼特集が美術関係の雑誌に組まれた。早いのは四月発行の『塔影』第一四巻第四号の「松岡映丘追悼特輯」であった。さらに、一九四〇年七月には国画院主催で「松岡映丘遺作展」が開催され、九月発行の『美術日本』第六巻第九号は「松岡映丘遺作展特輯」であった。兄の松岡鼎と弟の松岡静雄は亡くなっていたが、兄の井上通泰と柳田國男は健在だったので、それぞれに談話を載せている。先立った弟を兄たちがどのように偲んだのかを見てみよう。

まず『塔影』には「少年時代の輝夫」がある。弟の國男は美術に理解があるので、芸術上の相談相手になっていたようであるが、自分は美術に無関心なので、関係が薄かったという。しかし、少年時代は手元に置いて面倒を見たことをあげる。輝夫は御徒町に眼科医院を開業した通泰の家に、一八九一年、一一歳のときに母と静雄と一緒に身を寄せている。

松岡家は絵と無関係であったが、父の操には絵心があり、子供の時分にはよく絵を描いて遊んでくれた。その絵の多くは武者絵であり、機智に富んだものだった。学問の方面には濃厚な遺伝があったが、絵の方面の遺伝は輝夫一人に集中して伝わったと見る。通泰の家にいたときは暇さえあれば武者絵ばかり描いていたという様子は、それをよく伝える。

しかし、通泰はその後、姫路と岡山に行ったので、輝夫の面倒を見たのは國男であった。進学については、「輝夫が画家を志し美術学校へ入った際は、親は反対の意見であったが、自分が嘗（かつ）て医者になりたくないのに無理に医科に入らされたことを思出し、同時に柳田が親の反対を斥（しりぞ）けて最初の志望通り法科に入ったことを考え、当人の好める道に進むべきことを力説して美術学校へ入学させたのであった」と述べる。

美術学校へ進んだ輝夫が通泰に、「絵を描かせてくれ」と頼みに来た。それは、「小遣いが欲しくば絵を描け、決して只の補助はしない」と言い渡していたからである。この頃の絵は二幅残っているだけだという。一幅は養家・井上家の先祖・河野通有を描いたもので、一九〇五年、二五歳のときの作品、もう一幅は竜田姫を描いたもので、美術学校を出た一九〇四年、二四歳のときの作品であった。

他には、焼失したものに熊沢蕃山が深草の元政上人と邂逅（かいこう）している図があり、倅が結婚したときに祝ってくれた小幅もある。一人立ちしてから頼んで描いてもらったものはないが、著書や歌集の装幀はしばしば頼み、『万葉集新考』には巻頭の雄略天皇の御製にちなんで若菜を描かせた。『万葉集新考』を見ると、若菜は口絵ではなく、表紙の型押しになっている。著書の装幀ということでは、國男もしばしば頼んでいるので、こうした関係は共通のものだった。

先の竜田姫を表装して床の間に掛けておいたのが日本画家の水野年方の目に止まって、ほめられた。「絵は若いが中々見どころがある、何という人の絵ですか」と尋ねられ、「実は自分の末弟だ」と答えると、「それは知りませんでした、今後は気を付けて拝見しましょう」ということだった。「意外なところで面目を施した」と述べるが、自慢したわけではなく、輝夫の絵が識者の目に止まったのであるから、兄としてはうれしかったにちがいない。

同じ頃、尺八竪に『万葉集』の真間の手古奈を描き、「非常に力を入れて描いたのだからせめて絵具代でも何とかして欲しい」と相談に来た。通泰は金がなかったので、友人の医師・賀古鶴所（かこつると）に頼んで買い取ってもらった。この絵は蔵の中にあって、関東大震災のときも助かり、今も残っているという。このとき、賀古もすでに亡くなっていたので、思い出深いエピソードだったにちがいない。

人にやって今でも行方のわかるものとして、弁天様の大幅をあげる。遠州袋井にある曹洞宗の寺・萬松山可醒齋の住職・日置歌仙（後に永平寺管長）がこれを気に入って、何度となく「是非寺へ納めてくれ」と言ってきた。通泰は、「弁天様へお伺

いを立てたら坊主ばかりの所へ行くのは嫌だと仰言った」などと冗談を言ったが、結局、可醒齋に納められて、今でも寺にある。いつかこうした作品が姿を現すといいだろう。

話は先の河野通有の絵に戻り、一つ気に入らないところがあると述べる。蒙古襲来の際に一羽の鷺が飛んで来て、蒙古の大将の乗船を通有に教えたが、この絵は勘違いして鷺を射ようとしているように描いている。その点が嫌なのだが、武者の顔付きや格好を間違えずに描いているので、先祖の絵姿として我が家に伝えるつもりで所蔵しているという。

そして、忘れられないのが毎夏用いる浴衣の模様であった。河野通有の鎧下の模様が竜の丸なので、それを浴衣の図案にしようと考えて、下図を描かせた。以来、三〇年以上にわたって毎年揃えてきた。京都の呉服商が珍しがり、「決して売物にはしないから帯地や布団地などに自分の道楽で使うことを許してくれ」と頼まれた。最後は「輝夫の居らぬ今年の夏からは、浴衣を着る度にも、亡弟への思い出が新たであろう」と結ぶ。

次の『美術日本』には「亡弟松岡を語る」がある。多くは「少年時代の輝夫」と重複するが、そうでない話もある。遺作展の折、国画院の者が「どうしても出品したくて探したが所有者の分らない作が二点ある」と言った。一点は帝展に出品した「源氏」、もう一点は「維盛」である。「源氏」は益田孝が買って妹・繁子の嫁いだ瓜生外吉の所に移り、「維盛」は陛下の侍従である牧野伸顕のところにあることを通泰は知っていた。「維盛」は後で触れる「高野の維盛」であろう。

先の話では真間の手古奈は尺八竪の一幅の話しかなかったが、尺三の小幅と二幅であった。尺八竪は賀古医院にあり、尺三は米井商会主・米井源次郎の所に行った。また、輝夫から買い取ったもので珍しいものの一つに、彫刻家の内藤伸との合作の人磨の木像があったが、震災で焼けてしまった。遺作展が開催されたことによって、所蔵者や焼失など映丘の作品の行方が注目されていたことがわかる。

最後に触れるのは、一九一六年の第一〇回文展に「室君」を出品した前後の話である。輝夫は文展で自分の出品を認めてくれないことに不平を漏らした。そこで、「それは一度調子を変えてみろ、自分は絵の技術の事は分らないが、これは文学の方からの見解であるが信じて好いことである、だが一生そうするのではなく、世間に認められる間だけのことだということを必ず忘れるな」と助言した。「室君」で特選となった後、礼に来たので、「世間とはそうしたものだが、世に認められた上は今度は飽くまでも自分の信ずるところを貫かねばいけない」と言ってやった。

先の「少年時代の輝夫」では、「自分と輝夫との関係は大体輝夫が学校を出る時までで止って了っている」と述べていた。関係の濃淡から言えばそうしたことになるが、「室君」出品の際の助言にしても、映丘の人生を変えるほどの示唆であった。兄弟の関係は年齢とともに変わるのが当たり前であるが、通泰の中には弟の映丘を経済的に支えたという意識が強かったのだろう。それは、「小遣いが欲しくば絵を描け、決して只の補助はしない」や、「画家として一人立ちが出来るようになってからは、自分から頼んで描いて貰ったことは一度もない」などという言葉の端々に示されている。

松岡映丘
(1881～1938)

三　兄・柳田國男が偲ぶ松岡映丘

もう一人の兄・柳田國男には『塔影』に「考えさせられた事」がある。國男は「亡弟松岡の追憶を語れ」と言われても、「結局一個の私情を語ることになるし、いまは第一そうしたことを話す気持ちになれない」とためらう。兄の通泰は「輝夫」と呼ぶが、國男は「松岡」と呼ぶので、その距離感はずいぶん異なる。通泰は幼い弟としてしか見ていないが、國男は弟という以上に、一人の人格として見ている。國男はまだ映丘の死を冷静に受け止められていなかったように思われる。

國男が映丘に最後に会ったのは二月二二日で、亡くなる八日前のことであった。大塚の東京女子高等師範学校で「労働服の変遷」の講演をした後、雑司ヶ谷の病床を見舞った。「うつむいて絵を描くのは病気に障るから成るべく小さい絵を描くようにしなければならない」と忠告した。しかし、映丘は「結局自分一人で改良出来ることではない」とも、「大体日本画は上から筆を下して描くように出来て居り、昔の人も皆そうして描いていたのだから」とも言った。「今一遍会って話して来よう」と考えているうちに、訃報に接してしまったという。

映丘の病因については、体質が弱かった上に、煙草が過ぎたとしながら、「無病が却って無理をさせ、大作を続けているうちに知らず識らず姿勢を悪くし、それが遂に弟の健康への致命的欠陥となったものであろう」と推測する。最後の大作となった国画院の「矢表」と「後鳥羽院と神崎の遊女たち」にしても、衣裳の小さい模様まで自分で描いたので、どれほど体に障ったかわからないと考えている。日本画家の作画の姿勢と無理をして大作を試みる態度は、映丘だけでなく、日本画全体の問題にする必要があると考えていた。

通泰もそう認めていたが、國男自身も「弟が画家として立って以来、私は最も多くその相談対手となって来た」というだけに、映丘の若い死の原因を考えざるをえなかったのであろう。すぐ下の弟・松岡静雄は二年前の一九三六年に亡くなっていたが、『故郷七十年』の「手賀沼の蛸釣り」に述べるように、「手賀沼に蛸を釣りに連れて行ってやる」とからかった一件以来、「一生私のいうことをきかなかった」という。それに比べれば、映丘はずっと近い関係だったのである。

そして、もう一つ述べる。映丘の仕事で残念に考えていることに、「いい加減に人物画を止して大和絵の山水をやって欲しい」という希望がついに実現されなかったという。当人の好みもあり、依頼の場合もあって人物を主としたが、ほとんどが歴史画で終始したことを惜しんでいる。一九一四年の第八回文展に出品した「夏立つ浦」のような調子で、風景の方に進んでほしかった。この「夏立つ浦」は関東大震災で焼失してしまった。

一九一七年、柳田家の養父母の金婚式の祝いに描いてきた「春の海」と「秋の山」の双幅の山水があり、力を入れて描いてあるが、あまり賛成しないという。応接間に掛けてある「高原山」は一九〇七年頃（実際には、東京美術学校に赴任した一九〇八年）、塩原に写生旅行に行ったときの作品であった。これは「絵巻の中の色々な優れた描写を綜合的に纏め上げて新しさも見えている」と高い評価を下す。國男の言う風景画は、やはり写生や描写を重視したものであったと知られる。

次の『美術日本』には「遺業を偲ぶ」がある。國男は『塔影』の談話と重ならないように意識して語ったらしく、「誠に困った立場」と言いながら、今回の国画院の遺作展を見て新たに感じたことを述べてゆく。それでもやはり重視するのは、映丘に描いてほしかった風景画である。

最初にあげるのは遺作展に出品された「紅玻璃」で、一九一九年の制作である。國男が外国に行っていたときで、展覧会に出品されたことさえ知らなかったというが、やや時期がずれている。「今度始めて見て、松岡の風景画としては好い作品であると思った」と述べる。やはり評価するのは遺作展に出品された「紅葉の秋」（前述の「高原山」）で、「あんな風な風景画の方が私としては好ましい」と評価する。

また、兄弟が皆で映丘の仕事を援けたが、子供の描くものは決まって人物で、真似たのは凧の武者絵や人力車の後背に描かれていた歴史人物画であった。そうしたこともあって、最初から歴史人物画が専門のようになったらしい。國男は幕府の御絵所であった住吉家の最後の頃の堕落しきった作品をたくさん見ていたので、「こんなものからすっかり抜け切った違ったものを創造しなければいけない」とよく言った。住吉家に対する批判は、そのまま映丘にも向けられていたのである。

さらに何点かの作品の批評に及ぶ。一九三一年の「聖尼クララの寺」は「正直の処どこが好いのかよく分らない」とし、「笛」などに「持味がよく出ていて好い様な気がする」と述べ、一九三六年の「小楠公」は「実際に好いものだと自分も思っている」とした。珍しく人物画を評価したのは、「大和絵でこうしたタンペラマンが出せるとは思っていなかった」からであった。タンペラマンとはフランス語で気質を意味する。

最後に、「松岡の全体の仕事の印象は線よりも色彩の方に力が入れられてある」が、「もっと白描風のもの、線を生かしたものを見たかった」と述べる。この特集には、妻の松岡静野の「追想」もあり、映丘が色彩の美しさを追究するために、材料の使用法とその描法を研究していたことに触れている。

國男は映丘と六歳しか年齢が離れていないので、経済的な支援をすることはなかったはずである。國男に絵画の所蔵者についての言及がないのも、おそらくそうしたことによろう。「単なる鑑賞者」と言いながら、日本画家や美術史家のような専門家にはない観点で批評する。どうも國男は、「風景画」にしても、「もっと白描風のもの、線を生かしたもの」にしても、若くして亡くなった映丘にさらなる可能性を見ていたようである。こうした見方は兄の通泰には

見られないものであり、映丘を終始、「松岡」と呼ぶ客観性からそれは生まれている。

四　秋季企画展「松岡映丘画稿展」

記念館には一一〇〇点を超える映丘の画稿が収蔵されている。画稿は本画を制作するための下絵である。完成品ではないので、芸術的な価値は乏しいが、そこには本画に至る画家の構想や試行錯誤が残されていて、貴重である。なかには震災や空襲で本画が焼失して、画稿しか現存していないものもある。記念館では、保存と展示を考えて、軸装や額装を進めている。

弟子の岩田正巳は「新興大和絵のころ」の対談で、「先生の所へ行って「お願いいたします」といった所が、「君は中学時代にどれほどの物語とか国文学をやったかね」と訊かれたので、「何とか少しぐらいは習ったような気がします」と言ったら、「ばかなこというな、そんな勉強の仕方で歴史画なんてやれるものじゃない。ぼくは君、中学を出るまでの間に、現実をいえば『玉葉』のほか（古典文学は）全部読んだよ」と、もうそれだけでびっくりしましたね」と回想する。松岡家の教養と厳格な指導ぶりがうかがえる。

また、美術史家・木村重圭は「松岡映丘について」で、「宇治の宮の姫君たち」に触れて、「画壇への出発は、やはり古典文学中の最高峰『源氏物語』へ求めていたが、映丘の作品は大和絵の世界がそうであるように、いずれも古典文学に取材している。『源氏物語』をはじめとして、『栄華物語』『枕草子』『平家物語』『今昔物語』『太平記』等々からテーマを抽出して、それぞれの作品に仕上げた」と述べた。主な作品の一つに『平家物語』があったのである。

昨秋の「やまと絵でみる平家物語の世界」は、作品別展示の第一回とも言える開催になった。この企画展では、武者絵を得意とした映丘が日本を代表する軍記物語である『平家物語』をどのように絵画化したのか、その一端を示すことができた。その中から物語の展開に即して三点を選び、気づいたことを述べておきたい。その三点は、木曾義仲に追われて都落ちした平家一門と、それを追撃する源義経らの動向を描く。

①画稿「忠度訪俊成」

これは平清盛の弟・薩摩守平忠度の都落ちの場面で、巻第七の「忠度都落」に相当する。忠度は藤原俊成を和歌の師匠としていた。一門の人々とともに都落ちしたが、侍五騎と童一人と引き返し、俊成の邸を訪ねると、門の扉を閉じていた。「忠度」と名乗ると、邸の中では「落人帰り来たり」と騒ぎ合う。忠度が馬から降り、「別の子細候はず。三位殿（俊成のこと）に申すべき事あッて、忠度が帰り参ッて候ふ。門を開かれずとも、この際まで立ち寄らせ給へ」と言うと、俊成は門を開けて会うことにした。

映丘の画稿「忠度訪俊成」は一九一七年、三七歳のときの作品である。俊成の邸の従者が門の扉をかすかに開き、灯りを持った侍と会話をする場面を描く。脇に立つのが馬から降りた忠度で、後方には侍たちが馬とともに控えている。源氏の世の中に変わろうとする時代に、都落ちする平家の一人を邸に入れることは命がけの行為であったにちがいない。画稿ではあるが、『平家物語』本文には具体的に書かれていない緊張の一瞬を絵画化して見せている。

その後には、次のような話が続く。忠度は俊成に、勅撰集を撰ぶことになったとき、一首でも入れてほしいと頼み、秀歌を書き集めた巻物を鎧の合わせ目から取り出した。受け取った俊成はいい加減には扱わないと約束する。その後、俊成が『千載集』を撰んだとき、「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」の一首を「よみ人知らず」として入れた。忠度は朝敵になったので、作者名を載せられなかった。忠度と俊成の和歌に対する情熱を示す話であった。

②画稿「鵯越」

これは源義経が平家を奇襲する一の谷の合戦の場面で、巻第九の「逆落」に相当する。義経が谷底に陣取る平家の屋形や仮屋を見渡して、鞍を置いた馬を追い落とすと、三匹が上手に落ち着いた。そこで義経は、「馬どもはぬしぬしが心得て落とさうには損ずまじいぞ。くは落とせ。義経を手本にせよ」と言って、三〇騎ばかりの先頭に立って落ちて行き、大勢の侍がそれに続いた。

映丘の画稿「鵯越」は一八九七年、一七歳のときの作品で、姫路市立美術館に本画が残る。先の「忠度訪俊成」より二〇年早く、東京美術学校に入学する前の作品であった。「中学を出るまでの間に、現実をいえば『玉葉』のほか（古典文学は）全部読んだよ」という言葉は、大袈裟ではなかった。すでに大和絵の構図はできあがっていて、大盤石の谷を、侍がかざす灯りを頼りに真っ逆さまに駆け落ちる義経の勇姿を描く。頭を深く下げた馬と、それでも直立する義経のバランスが見事である。

この後には次のような話が続く。垂直に切り立つ谷を目にした侍たちは途方に暮れるが、佐原義連が進み出て、三浦の方ではこのような場所を馳せ歩いていると言って、先頭に立って駆け下りたので、侍たちも続いて下った。三千余騎だったが、やまびこが反響して一〇万余騎に聞こえた。村上基国の手の者が火を放って、平家の屋形や仮屋をすべて焼き払った。義経の判断は見事であり、平家は四国の屋島に落ちて行くことになる。この合戦は平家の敗走を決定的にしたと言うことができる。

③画稿「高野の維盛」

これは清盛の孫・平維盛が高野山にいる滝口入道時頼を訪ねた場面で、巻第一〇「横笛」「高野巻」に相当する。維盛は都に残した妻子のことが忘れられず、郎等の重景・童の石童丸・舎人の武里を連れ、船で紀伊に向かう。しかし、叔父・平重衡が生け捕りになったことを思って都へ行くことは断念し、高野山に登った。そこには、かつて侍として仕えていた時頼が出家していた。時頼は横笛との関係を父に咎められて、一九歳で出家した。嵯峨にいる時頼を横笛が捜し求めて来たので、再びそのようなことにならないように高野山に移った。維盛はそこを訪ねたのであった。

映丘の画稿「高野の維盛」は、制作時は不明であるが、細部まで丁寧に描いている。時頼は三〇歳にもならないのに老僧姿にやせ衰え、深く仏道に心を入れた道心者になっていた。中央に苦悩する維盛の姿を描き、左には時頼が合掌して数珠を持つ姿の一端を描く。手前には鎧姿でうなだれる姿を描くが、重景であろう。本文には、二人が対座する席に重景が同席したことは書かれていない。それぞれの姿に映丘の洞察力が発揮されている。

この後には次のような話が続く。維盛は時頼に、ここで出家して、熊野参詣の宿願を果たしたいと語る。重景と石童丸に菩提を弔うように頼むが、二人はそれを断って自ら髪を剃り、維盛も出家する。武里には最期を見届けて、屋島に戻るように言う。その後、維盛は熊野三山の参詣を済ませ、時頼の導きで那智の沖に入水し、重景と石童丸も続くが、武里は泣く泣く屋島に戻る。平家嫡流の維盛の数奇な人生が語られている。

こうして見るだけでも、映丘の大和絵が従来のものと違うことは明白である。特に「高野の維盛」は、妻子への執着と浄土への憧憬に苦悩する維盛の姿を見事に描く。大和絵でありながら確固たる人間像を表出したところに、映丘の達成がある。これが画稿でなく、色鮮やかな本画であればさぞやという思いはあるが、それに固執する必要はあるまい。先の話では、「維盛」という作品が牧野伸顕の所蔵であることも確認できているので、いつか見ることができるかもしれない。そして、一一〇〇点を超える画稿のデータベースが構築されれば、私たちは松岡映丘の全体像に迫ることができるはずである。

画稿「高野の維盛」

引用文献

・市古貞次校注・訳『平家物語②』小学館、一九九四年。
・姫路市立美術館ほか編『生誕一三〇年松岡映丘展』神戸新聞社、二〇一一年。
・姫路文学館編『松岡五兄弟』姫路文学館、一九九二年。

（柳田國男・松岡家記念館顧問、東京学芸大学教授）

福崎町鍛冶屋地区のかくしほちょじについて

福崎町教育委員会社会教育課　樋口　碧

はじめに

福崎町八千種地区に所在する鍛冶屋地区では、毎年成人の日の前日から翌日にかけて「歳の当」、1月26日に「宮の当」と呼ばれる行事が行われている。この行事は複数の行事から成るものである。また、これらの行事は住民のうち、輪番で選ばれた9名が全て取り仕切り行っており、彼らは「親」と呼ばれている（以下、「当人」と呼ぶ）。その9名の氏名は「順番帳」に毎年記載されており、確認できる最古のもので明治20年のものがあることから、少なくとも130年以上継承されてきていることが分かる。

この行事は「かくしほちょじ」という、子どもがほちょじを隠すという他の地域では見られない特徴から昭和53年に町の指定文化財となっているが、本来どのような行事であるのか、また、どのようにして現在まで継承されてきたのか、町の記録等から考察したい。

1．鍛冶屋地区イットウについて

福崎町には地区によって同じ姓を持つ世帯が占める割合が大きいところがある。これをイットウと呼び、鍛冶屋地区では、中塚、白井、上田イットウがある。「歳の当」や「宮の当」の各年度の当番の名が記載されている「順番帳」を見ると、明治20年から41年まで、それら以外の姓は確認できない。これは、他地域からの移住がほとんどなかったことや養子縁組等の理由が考えられる。

鍛冶屋地区　組分け

後に、現在の8・9隣保の地区で宅地開発が行われ、他地域から人が入ってきており、違う姓がみられるようになる。

2．歳の当・宮の当

当人は現在の鍛冶屋公民館西側の東西方向の道から南北に分けて北を裏組、南を前組に分け、裏組から4人、前組から5人が選ばれる。現在は、玉屋周辺で宅地が増えたため、8組を裏組、9組を前組に分けている。この9人の中から2人が「親の親」になる。2人の「親の親」はそれぞれ「歳の当」と「宮の当」の責任者になり、主体となって行事を仕切る。

（1）歳の当

現在は成人の日の前日から翌日にかけて行われているが、以前は小正月の前日と翌日にかけて行われていたそうだ。成人の日が月曜日になった関係で日程が変わっている。

以下、平成31年1月12日、13日に行われた行事を中心に、各要素となる行事の状況を記す。

①ほちょじ立て

当人たちで話し合い、1月第1日曜日頃に竹や袴づくりの準備が行われた。9人の当人が竹取りから藁編み、ほちょじ立てまで全て行う。藁は前年の秋に230把程度用意しておく。竹の編み方は決まっており、6本の竹を使い、12本の藁の紐で固定する（閏年については13本）。葉がたわわとしているようすは豊作を示すため、できるだけ葉が多く、まっすぐな竹を選ぶ。藁でできたくまびきは、30mほどの長さになる。現在、ほちょじは「歳の当」前日に鍛冶屋公民館前の駐車場に設置されるが、公民館で行われる以前は「親の親」の家の庭に立てられていた。「親の親」の家の庭が狭い場合、他の当人宅に立てたこともあったそうだ。

この日、「お賽さん」をサイノトウ神社から掘り出す。「お賽さん」はご神体とされ、毎年同じ場所に埋められている。13個埋められており、平年は12個、閏年は13個掘り出した後に洗い、公民館にまつられる。「お賽さん」は円形の20cm程の大きさの石である。

個人宅にたてられたほちょじ
（『広報ふくさき』昭和50年1月号から）

②酒宴

成人の日の前日の18時から催される。酒宴会場に女子はいなかった。

当人の他、厄年、還暦、その年度に集落に入った者が献酒する。

酒宴の開始時に「歳の当」の責任者である「親の親」が祝詞（のりと）を読み上げ、当人及び献酒の紹介をした後で、住民に升に入った「御洗米」と呼ばれる新米を机の列ごとに回す。ナンテンの葉で新米をすくい、一人7、8粒程度口に含む。皆に回った後に酒宴が始まる。

酒宴は集落の全戸から一人ずつ参加し、親睦を深める機会となっている。区の外に出た当人の息子らもこの行事のために実家に戻り、酒宴に参加することがある。

酒宴会場の前にはお供え物が並ぶ。小豆（あずき）飯1杯、升に入った「御洗米」3杯、塩、酒（一升瓶）、大根1本、にんじん1本、みかん3個、いりこ1皿である。その隣に行事に使う御幣やその年の祝詞、順番帳を入れた箱、「お賽さん」が並ぶ。

③ほちょじ隠し

19時頃になると、大人がほちょじを解体して運びやすいように竹を切り、子どもによって集落内に隠される。現在は安全のため、小学校5、6年生が保護者同伴のもと行っているが、聞き取りによると、以前は地区内の小学生男女が子どもだけでほちょじを解体して隠し、その後さらに中学生らが大人に見つからないような別のところへ隠していたそうだ。子どもがほちょじを隠す理由は伝わっていない。

④帳渡しの儀

20時頃になると次の当人への引継の儀である帳渡しの儀が行われた。「順番帳」を箸で持ち、歳の当の「親の親」、宮の当の「親の親」がそれぞれ次の年の者へ渡す。当人は輪番で約13年に1度回ってくるが、「親の親」は9人が話し合いの上で決める。

⑤無言の行

0時から、「親の親」二人によって無言の行が行われた。茶碗に1杯ずつの小豆飯といりこ1匹と箸を1本持ち、それぞれが決められた道を通ってサイノトウ神社へ向かって歩く。到着後、無言のまま1本の箸で持っていた小豆飯といりこを食べ、その後箸で茶碗を叩き、食べ終わったことを合図する。そして「おうおう」と言い、箸を決められた場所に立て、元来た道を戻る。

⑥狐追い

当人7人で行われた。「親の親」二人は公民館で待機していた。

熊野神社を起点に出発する下の組と稲荷社を起点に出発する上の組に分かれて行われる。全員が2m弱の竹の棒を持ち、それぞれのコースで二つずつ御幣（ごへい）を持ち、決められた場所に挿して帰ってくる。熊野神社本殿、稲荷社にそれぞれ向かい、お参りをしてから出発する。

歩くときは、「キツネガイオロロ」と一人が言い、他の者が続いて「オロヨ」と繰り返す。

御幣は村の境界に挿されていることから、村を悪いものから守るという意味があるそうだ。この行いは、狐を悪さをするものと見なし、地区の外へ追い出すことを意識したものと思われる。

⑦ほちょじ探し

小学生が隠したほちょじを当人が探す。ほちょじは集落内全域が隠し場所であるため、朝まで見つからなかった年があったそうだ。

見つかったほちょじはサイノトウ神社に当人たちの手により立てられる。その時に、公民館でまつっていた「お賽さん」を中に入れる。

狐追い　経路

⑧ほちょじ焼き

ほちょじ焼きは朝6時から始まる。8時くらいまで住民が正月飾りを焼くためにやってくる。住民は火に当たりながら餅や子どもの習字を焼く。習字は高く舞い上がれば上達すると言われている。

この時、玉屋から5個の「お賽さん」が運ばれ、一緒に温められた。玉屋では別に「お賽さん」が伝わっている。新しい宅地であったためであろうか。なお、「お賽さん」を温める理由については伝わっていない。

温められた「お賽さん」は、サイノトウ神社の決められた場所に埋め戻され、御弊を立ててまつられる。玉屋の「お賽さん」の数は、初めに玉屋に住んでいた5軒の家のことを指すのではないかと伝わる。

玉屋では、元は道祖神の下に「お賽さん」を埋めていたが、昭和52年頃の耕地整理で道祖神である石造物が別の場所に移動したため、サイノトウ神社に埋めるようになったそうだ。「歳の当」の前日に「お賽さん」を掘り出し、玉屋の当番の家の床の間にまつられ、ほちょじ焼きの時に温められる。玉屋の古老によると、道祖神の元に埋められていた頃は、「お賽さん」は温めてはおらず、当番の家の床の間にまつって行事が終わった後にそのまま埋め戻されていたとのこと。現在の場所に移った時に鍛冶屋地区のものと一緒にほちょじで温め、サイノトウ神社に埋めることになったと思われる。現在、玉屋の当番の家は3軒のみである。

玉屋に続き、公民館でまつられていた「お賽さん」も火から取り出され、サイノトウ神社に埋められる。「お賽さん」を埋めた後、当人でその年1年の無病息災を祈っておまつりを行う。

なお、現在その場所をサイノトウ神社と認識している者はほとんどいなかった。埋められる場所が地区の境界に近いことから「賽の神」がまつられているのだろう。

(2) 宮の当

「宮の当」は、熊野神社で行われる。18時頃から神事を行い、その後酒宴を催す行事である。祭壇には、いりこ、塩、洗米、みかん、大根、人参、赤飯、御神酒を供える。近年はその年の当人と翌年の当人、地区の役員のみの参加となっているが、かつては「歳の当」と同様に、ほとんどの住民が参加していたそうだ。

神事は地区の神主が行い、その後皆で食事をする。

3. 歳の当の変化

明治20年から現在まで130年間途切れることなく継承されている「歳の当」。現在は映像や写真を用いながら翌年の当人に引き継ぎをしているが、ビデオ等の電子媒体がない時代、口承や紙媒体により伝えるしか方法がなかったため、行事の詳細については少しずつ変化してきたと考えられる。

教育委員会には、昭和48年、平成6年、平成13年、平成14年、平成15年、平成16年、平成24年の記録があり、行事の変化を追うことが可能である。

4. 「順番帳」の記録から

「順番帳」には、変化が起こった際に文字にて記録（覚書）が残されている。「順番帳」は4冊現存する。「歳の当」「宮の当」用の箱がそれぞれあり、その中に裏組、前組の「順番帳」が2冊ずつ入っている。変化があるときは、地区の総会で決めているとのことだ。以下、「順番帳」から変化のあった年の記述を記す。

(1) 明治20年

最も古い年代で、この頃は集落を北組と南組に分けていた。

(2) 昭和35年

「昭和三十五年一月執行の歳の当より従来の二組制を三組制に改め当人は各組毎に三人とする」とある。戸数が増えたため、北（5・6組）・中（1・2組）・南（3・4・7組）の3か所に分かれて宴会を催していたそうだ。しかし「順番帳」は2冊のままで、2組、4組が同じグループで酒宴を催すが、前組と裏組の者が混在する状況となっており、この状況は平成3年、会場が公民館になるまで続く。他に、「歳の当」及び「宮の当」に係る経費についてもそれぞれの「順番帳」に記載されている。

(3) 昭和49年度

「昭和四十九年度よりトントの焼場所が変更された十四日夕方自由場所とする」と記されているが、昭和53年に町の文化財に指定されたことから、「昭和五十三年より町指定文化財となり従来に復する（朝十五日に焼くことと総会で決定する）」となっている。

(4) 平成3年度

「順番帳」に記載されている当人の名が裏組では3人から4人、前組では3人から5人に増えている。戸数増加のため、当人の数が増えたのかもしれない。

5. 町内の民俗行事

福崎町内各地区でも、それぞれ多様な民俗行事が行われているが、鍛冶屋地区のように複数の行事が同時に行われるものはほとんどない。以

下、要素となる民俗行事について鍛冶屋地区のものと比較する。

（1）狐追い

「歳の当」の構成要素である狐追いは、町内では他に西大貫・南大貫地区で行われているが、鍛冶屋地区と異なるのは、大人と子どもで行われることだ。南大貫地区では、トンドの前日に地区を3つに分け、毎年持ち回りで各当番の家で料理を振る舞い、その後に狐追いを行う。地区の稲荷社から出発し、地区内を歩く。大人が「キツネのオロヨ」と言った後、子どもが「オロオロヨ」と続く。狐が作物を荒らさないように願って行われるものである。西大貫地区では、トンドと同じ日に行われている。現在は、少子化等の関係で数年に1度の頻度で行われているそうだ。

狐狩り（狐追い）とは、「小正月の前夜に行う狐に象徴される害獣をムラから追い出し福を招く行事」のことで、兵庫県・京都府・大阪府の北部から福井県・鳥取県にかけて分布している。唱える言葉も一様ではないが、狐のみならず、病害等をムラから追い払う意の言葉を唱えているところがほとんどのようである（『日本民俗大辞典』参照）。

（2）トンド（左義長）・斉灯

行事の主要要素であるトンド（左義長と呼ぶ地区もある）は町内34地区（上中島含む）のうち21地区が行っている。11地区ではトンドは行わないが、2月3日の節分の日に斉灯を行っている。また、10地区が両方実施している。両方実施している地区については、人口の多い地区であるかトンドを各隣保で行い、斉灯を地区全体で行っているかのどちらかである。トンド、斉灯ともに冬に行われる火祭として位置付けられているが、行事の意味は異なる。

トンドは「小正月に行われる火祭行事」である。正月飾りの処理を行うとともに、正月の神送りとして考えられることが多い。この行事には、子ども組の活動が顕著に見られ、鳥追いなどの行事が付随することもある。また、厄落としの行事が行われることもあり、この火で「モノヅクリの団子」などを焼いて食べると病気にならないとしているところも多く、町内では餅を焼いて食べている地区がほとんどである。

斉灯は「小正月の火祭」で、東日本では、道祖神がまつられているところで行われる（『日本民俗大辞典』参照）。

トンド、斉灯ともに火祭とされており、左義長は中部地方で道祖神祭とも考えられている例があり、斉灯も道祖神がまつられているところで行われる。このことから、両者は道祖神の祭りとして各地で受け継がれている可能性がある。鍛冶屋地区でも地区の境界付近で行われていることを考えると、「ほちょじ焼き」は道祖神の祭と考えられよう。

「歳の当」の要素のうち、狐追いとほちょじ焼き（トンド）は地区の境界を意識した道祖神の祭りであることが民俗例から考えられた。行事全体として地区の外に悪病等を追い払う意味を持っているのであれば、子どもがほちょじを隠す行為や無言の行についても、同様に地区外へ悪いモノを追い払う意味を持っている可能性があるのではないだろうか。

おわりに

鍛冶屋地区では、「歳の当」は住民が必ず参加しなければならないとされている行事である。近年、宅地開発等で外から当地区に移り住む人が増えているが、区長は徹底して地区の行事には参加するよう伝えているそうだ。このような、元々住んでいる住民の意識やそれを受け入れる外部から移り住んだ人の強い意識でこの「歳の当」「宮の当」の行事が成り立っていると言える。

少子化が叫ばれる昨今、民俗行事の担い手が少なくなっているという状況は、当地区も例外ではなく、子どもがほちょじを隠すという行事名ともなっている「かくしほちょじ」や「順番帳」からも行事の姿が少しずつ変化していることが分かる。ただし、このような状況下にありながら、ほちょじ隠しを大人が手伝うなど、緩やかにその姿を変えながらも継承されている姿が見受けられる。この行事が、何十年先も続いていることを願ってやまない。

この調査は、兵庫県主体の「兵庫県の祭り・行事調査」に際して、兵庫県から調査を委託された宗教民俗学者の本林靖久氏と行ったものである。この記録を作成する際、左記の方々に聞き取り調査に協力いただいた。（敬称略）

中塚龍一、中塚保彦、上田照博、中塚貞義、中塚重信、上田喜代文

参考文献

『福崎町史』第一巻
広報ふくさき　昭和50年1月号
『日本民俗大辞典』上　1999年
吉川弘文館
『日本民俗大辞典』下　2000年
吉川弘文館

第七回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学生高学年の部　受賞

わたしの名前と福崎町について

八千種小学校五年　内藤　のこ

◆調べようと思ったきっかけ

わたしの名前は「のこ」といいます。わたしはこれまで、お父さんが大工だからこんな名前だと思っていましたがそうではありませんでした。お父さんに聞くと、「この八千種を作った人の名前からもらって付けたんやで。古い書物にもでてくるで。」と教えてくれました。わたしは自分の名前の由来の人が何をした人なのか。そして福崎町がどうやって出来たのか。すごく気になったので調べる事にしました。

◆播磨国風土記

この書物は日本最古の書物「古事記」が完成した次の年、713年に元明天皇の命令で作られました。今からなんと1300年ほど前の物です。古事記、日本書紀、風土記など日本の歴史が初めて記録された時代でした。

風土記は当時60余りあった「国」ごとにあったのですが、今残っているのは「播磨」「常陸」「出雲」「肥前」「豊後」の5つの風土記だけしか残っていません。中でも「播磨風土記」は最も古く、大変貴重なものだといわれています。この本には地名の由来、土地の産物、古くからの言い伝えなどたくさん書いてありました。

・八千軍野の由来

この地名は大昔に伊和（イワ）大神（オオカミ）と天日（アメノヒ）槍（ボ）命（コ）（神様と神様）が争っている時に天日槍命がここに八千人の兵を置いたので八千軍（ヤチグサ）野というようになりました。今の八千種です。八千人の兵でどんな争いがあったのでしょうか。

・戦いの初まり

この辺りは伊和大神が国を作っていました。そこに新羅の国の王子、天日槍命が揖保川の河口にやってきました。天日槍命は「わたしの住む所を与えて下さい」と言いましたが、伊和の大神は陸に上がることを許しませんでした。

天日槍命は剣で海をかき回し、大きなうずを起こしてその上にどっかりと腰をおろしました。その力強い姿を見て伊和大神は「ぐずぐずしておれぬ。戦いの準備じゃ」と戦いが始まりました。

宍粟市にある播磨国一宮伊和神社（伊和大神）
ＶＳ
豊岡市にある但馬国一宮出石神社（天日槍命）

・戦い

天日槍命の勢いにおされた伊和大神は腹ごしらえに食事をします。しかし、戦いであわてていたのでポロポロとご飯粒が落ちました。ここを粒岡と書いて、いひぼおかと言い、揖保川の名前の元になりました。二つの神様達は揖保川を上りながらたくさん戦いを続けます。

神崎郡でも糠岡という所があります。これも伊和大神が多勢の兵の米をついて糠が丘のようになったことが名前の由来です。（姫路市八幡）この戦いで天日槍命は八千種に八千人の軍を置きました。とても大きな戦いだったのでしょう。

・終結

この戦いでは、つる草を三本ずつ足につけて落ちた所を取り合いました。天日槍命は全部出石に落ちてしまいましたが洪水で困っていた人々のため働いたので今では出石神社にまつられています。伊和大神のつるは、養父郡の辺りに落ちました（養父神社）。伊和大神は伊和神社にまつられています。

神崎郡

伊和大神の子を建石敷（タケイワシキノ）命（ミコト）といいます。建石敷命は山崎の神崎山にいました。神の前に広がった所という意味で神前郡と呼ばれ、神崎郡の名前の由来になっています。山の下には二宮神

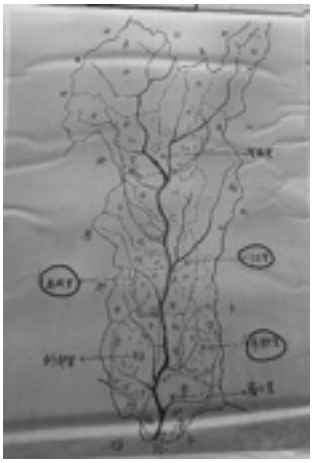
社があり、建石敷命がまつられています。

山崎の二宮神社

山頂にはおおきな岩があり、建石敷命は神崎郡開拓のシンボルです。

福崎町

神様達の戦いが終わり、今の福崎町には高岡里、川辺里、多駝里の3つの里がありました。



○高岡里は神前山、奈具佐山など高い岡があります。故に高岡と名付けられました。奈具佐山には檜が生えています。（福崎地区）

○岡部川のほとりです。応神天皇がここで狩りをされました。猪や鹿がいっぱいいて、犬を使って出していました。勢賀→瀬加（瀬加～田原地区）

○応神天皇がこの辺りを見回りされた時、お伴の阿我乃古（あがのこ）という人が「この土地が欲しいです」と申しました。それを聞いた天皇が「タダニ（素直に）ねだったのだとおっしゃった。それで多駝と名づけられました。（大貫、八千種、船津、山田地区）

・七種と八千種の伝説

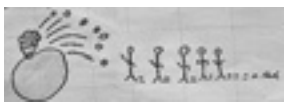
八千軍野の人達はある年、水害に続く干ばつで次の年に持ち越す種もなく、多くの餓死者も出てすっかり弱っていました。その時、一人の農民が奈具佐方面に山芋ほりに行きどんどん山道を入っていくと、日照り続きの日だったのに水音がしました。さらに深く山へ登ると滝の水の流れる音でした。（七種の滝？）

滝の源にたどりつくと「お前はどこから来たか？」と一人の人間の声がしました。びっくりした農民はにげようとしましたが、白いかみの老人が現れ、「にげなくてもよい」と言いました。農民は、村では水害や干ばつで米も大豆も小豆も作物はみんなとれず困っていると説明しました。白いかみの老人は「かわいそうに」と言いながら大きな木の根元をほり、一袋の包を出し、「この中に七種類の種が入っている。これを持ち帰れ」と農民に与えました。

農民はよろこんでお礼を言って受け取り、村へ持ち帰り、中を見ると、米、ひえ、大豆、小豆、麦、栗、きびの七つの種が出てきました。そのふくろからは尽きる事なく種が出て来て人々はみんなで分けました。

農民たちはそれから奈具佐の地を七つの種の村。七種村と呼んだそうです。その時種を持ち帰り助かった八千軍野の人々は助けてもらった恩を強く思っていたので後にこの種の字を使って軍を種に変え、八千種村と変えたそうです。

奈具佐山→七種村
八千軍野→八千種村



・大昔からの福崎町の歴史

天日槍の軍隊が八千人いた八千軍野。伊和大神の子、建石敷命が神前山におりたった高岡里。八千種と高岡、山崎、七種の地名は播磨国風土記に由来がのっているすごく古い歴史のある地名でした。川辺野（田原方面）も誉田天皇と応神天皇が狩りに六回も来ています。研ぎ石等が山から出てきて、道具を直すのにも便利だったようです。

◆わたしの名前の人物

多駝里の阿我乃古（あがのこ）は、応神天皇のお供で福崎町東部地区に来ていましたが、「この土地を私にください」と天皇に言ってここにとどまり、この多駝を最初に作り上げた人物です。日本書紀では『阿良津神』として出てきますが、これは『阿我乃古』と同一人物です。

姫路市白国にある佐伯神社にまつられています。

◆感想

わたしはこの福崎町に関する物を調べて、大昔の事が今も形を残して語り継がれているのは、みんながこの福崎町が大好きでそして大切にする心があるからだと思いました。そしてたくさんの想いがあるからこそ形になって神社や物語として残っているんだろうなと思います。わたしのお父さんもこれからの時代を大切に作り上げていってほしいという願いを込めて「のこ」と名付けてくれました。わたしも自分の願いも一緒に乗せて、がんばっていこうと思いました。

第七回福崎町柳田國男ふるさと賞 小学生低中学年の部 受賞

ひいおばあちゃんが子どものころの家

田原小学校四年　長澤　茉里奏

私の家には百一歳になるひいおばあちゃんがいます。昔はどんな生活をしていたのか興味があったので、ひいおばあちゃんに、子どものころに住んでいた家は、どんな家だったのかを聞きました。

昔の家の屋根は、今のようなかわらではなく、かやぶきで、一階建ての平屋でした。戸口（玄関）を開けると、広い土間が裏口まで続いていました。土間は、土のままの部分です。土間の右側には牛舎（牛小屋）がありました。牛は牛舎から首を出して、土間に置いていた「かいおけ」のエサを食べていました。昔は、畑や田んぼを耕すのに牛を使っていたので、牛は、とても大切にされ、一つの財産でもあったそうです。

牛舎の横の納屋では、雨の日や冬の間は、わらを使って縄を編んだり、「むしろばた」という織り機を使って、むしろを織ったりしていました。また、織ったむしろを、「かます」という、じょうぶな袋にしてくれるところが、井ノ口と馬田にあったそうです。

土間の奥の方には、「おくどさん」といって、かまどが三つ並んでいました。一つのかまどには、いつもお茶をわかす茶がまがあり、残りの二つのかまどで、ごはんとおかずを作っていました。土間の奥の左側には、調理をする台や洗い場、井戸の水をくんでためておく水がめがありました。

出口から外へ出ると、少し離れたところに井戸があり、井戸の水をくんで顔を洗ったり、食事に使ったり、洗濯などもしていました。お風呂も土間のところにありました。お風呂の水も井戸の水を使うので、何度もくみあげてお風呂まで運んでいたそうです。

ひいおばあちゃんは、「かまどやお風呂の火をたきつけるのに、木の枝やこく葉を使ったんや。そやから、子どものときは、かごを背中に背負って近くの山へ行って、こく葉拾いをしとったんや。お風呂もわかしすぎると熱くなりすぎるから、熱い！といわれたら、あわてて井戸から水をくんできて、お湯の調整をしていたんやで。」と笑いながら教えてくれました。

土間の左側は住まいになっていました。床を張った部分です。そこには、田の字のように四つの部屋がありました。

仏壇と床がある「奥の間」、入り口に近い「口の間」。この二つの部屋からは庭が見え、お客さんが来られた時や村の集まり、結婚式やお葬式など、特別な時に使われる部屋でした。口の間の隣の「茶の間」は、家族が食事をとったり、くつろいだりするときに使う部屋です。一番奥にある「納戸」は、寝るときに使う部屋で、夜になるとふとんをしいて、家族みんなで寝ていました。赤ちゃんも、病院ではなく、この部屋で産んでいたそうです。

電気は、十六ワットの電灯が家にたった一つだけだったので、うす暗い中で生活をしていました。ひいおばあちゃんの家は電灯があったけど、山の中の地区では電気がまだなくて、「ことぼし」というランタンのようなものを使って明かりにしていたそうです。

ひいおばあちゃんは、「戦争が終わってから、いろいろなものがどんどん変わっていったんよ。農業も機械化されて手を使わなくなっていったし。」と言いました。今は、機械があって、ボタン一つでご飯を炊いたり、水の温度を調節したり、いろんなことができるようになったので、とても便利になりました。

昔の家や生活の様子は、今と違うことばかりで、生活するのも大変だったろうなと思い、ひいおばあちゃんに、「昔の生活は不便だった？」と尋ねてみました。すると、「その生活が当たり前のことだったから、大変だとは思わなかったよ。」と笑いながら答えてくれました。

大正生まれのひいおばあちゃん。学校のこと、遊びのことなど、もっともっといろんなことを聞いてみたいと思いました。

第七回福崎町柳田國男ふるさと賞　中学生の部　受賞

昔から残る桜の獅子舞

福崎西中学校一年　岡本　琉那

◆はじめに

私の住む桜地区で一時期途絶えていた獅子舞が復活しました。その獅子舞が復活するに際して、自分も獅子舞に出演させていただくことがありました。その中で獅子舞に興味を持ち、獅子舞はどのようなものだったのか獅子舞のルーツなどを詳しく知りたいと思い調べることにしました。

◆獅子舞について

「獅子舞」とは、日本各地に伝わる伝統芸能の一つで祭囃子に合わせて獅子が舞うもののことです。現在は地方によって様々ですが、主に正月などの縁起の良い日に行われます。厄病退治や悪魔払いをするものが一般的だといいます。

獅子舞の起源は、中国ともインドとも言われています。どちらの説が正しいのかは定かではないそうですが中国の獅子舞が最古とされる記録が「漢書」にあるそうです。

日本では16世紀初めに伊勢（三重県）地方でききん、疫病を追い払うために獅子舞をつくり、正月に獅子舞を舞わせたのが始まりといわれています。その後、17世紀に伊勢地方から江戸に伝わり疫病退治や悪魔払い、世を祝う縁起ものとして行われるようになりました。急速に日本各地に広まったのは「江戸大神楽師」、「伊勢大神楽師」と呼ばれる団体が獅子舞を踊りながら各地で悪魔払いをしたことがきっかけと言われています。ちなみに獅子舞には伎楽（神楽）系と風流系があり、桜区の獅子舞は伊勢大神楽系統の神楽獅子だそうです。

◆桜区の獅子舞

1、文化財桜獅子舞

桜区に伝わる獅子舞は、昭和53年に町から指定された民俗文化財です。昭和53年以前も奉納が途絶えることもあったそうですが、衰退と復活を繰り返したのち、平成20年に再度復活したことで、現在に至っています。

2、昭和53年以前の桜獅子舞

桜区の獅子舞がはじまったのは、約90年前、昭和7年（１９３２年）だそうです。桜獅子舞保存会の会長さんによると薬師堂を新築するときに姫路市山田町の方に獅子舞を教わり、村の若い人たちで始めたのが、桜獅子舞の起源だそうです。初めて桜の獅子舞をやったというのが保存会会長さんのお父さん方の世代だったと聞き、とてもびっくりしました。それから約10年間、獅子舞は続けられましたが、後継不足のため途絶えてしまいました。

3、昭和53年頃の獅子舞

その後、昭和32年頃に再び桜の獅子舞は村の人たちによって復活しました。そのとき獅子舞は舞子が10人程度、はやし子も10人程度でやや少ない人数でした。はやす笛も3～4人で他の地域よりもかなり少ない人数だったようですが、ほぼ毎日あったという練習のおかげで多くの演目をこなせたそうです。

しかし、再び復活した桜獅子舞ですが継承者の高齢化や後継者育成の困難さから、再び途絶えてしまいます。そして最後の桜の獅子舞として昭和55年（１９８０年）に奉納されました。最後の奉納となったのは昭和55年の秋祭りに神谷大歳神社参詣が行われた時でした。「もう見られなくなるのか。」と惜しまれながら桜獅子舞は幕をとじたそうです。

4、再度復活！桜獅子舞

幕をとじた桜獅子舞ですが、その後30年後の平成20年に再び復活します。平成13年頃から「復活させては」との声が上がり、寄合などで話し合った結果、桜区の消防団の方々が中心となって練習をはじめました。平成17年からは一部だけでしたが、秋祭りの際、桜大歳神社にて奉納を行いました。現在でも消防団の方々が中心となり、はやし子は子ども会の中から数人でやっています。私もはやし子として獅子舞と一緒に舞ったことがあります。練習も楽しく本番では緊張するけれど、とても達成感があり楽しいです。

5、これからの桜獅子舞

これまでに書いたように、色々ないきさつがあり、何度も途絶えてし

まいながらも桜獅子舞は地元の人々に愛され続けてきました。しかし、課題もあります。これからの桜獅子舞について、桜獅子舞保存会会長さんと桜区消防団の方にお話をうかがいました。

（桜獅子舞保存会 会長　大杉さん）

村の若い人達が立ち上がり、復活させてくれたのはうれしかった。しかし、せっかく復活させたけど今まで同様、長く続かないのではという心配もある。伝統を受けついでいくのは大変だと思うが、消防団だけでやらせるのではなく他の人達も協力して無理せん程度に頑張ってほしい。

（桜区消防団　岡本さん）

「消防団を中心にやろう！」と頑張ってここまでこれたのは、いいことだと思う。練習ももちろん大変ではあるが会長をふくめ、昔、桜獅子舞をやった人から学んで楽しくさせてもらっている。まだ完成度の低い演目もあるが僕たちの後を継いでいってくれる人を育てていくことも考えつつ、いつか二之宮でも奉納できるようになればと思う。

とコメントをいただきました。私もせっかく復活させたのだから長く続いてほしいと思うけど、今の状態では消防団の方への負担が大きすぎると思います。私達が積極的に協力して一緒に引き継ぐことができるといいなと思います。

◆おわりに

今回、桜区に伝わる獅子舞について資料を集めたりインタビューをしたりして調べてきましたが、自分の住む地区に歴史ある伝統芸能があるということはすばらしいことだなと改めて思いました。今は、消防団の方々が中心にやっておられるけど、もっと桜区全体が協力すれば長く続かせていけるのではないかと思います。また調べるにあたって図書館などには、ほとんど資料がないことにおどろきましたが、地域の方にご協力いただき、詳しいことまで教えていただきました。ありがとうございました。

桜獅子舞のもっと詳しい歴史や、獅子舞を通しての他地区との交流について、そして姫路市山田町の獅子舞や市川町甘地の獅子舞の歴史についても、詳しく調べてみたいです。

第三十八回 福崎町美術展作品募集

第三十八回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。皆様方のご応募を心よりお待ちしています。

会期　令和二年五月二十二日（金）～五月二十四日（日）
会場　福崎町エルデホール
主催　福崎町・福崎町教育委員会
部門　日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸
応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。
作品搬入　令和二年五月十六日（土）午前九時～午後四時
作品　未発表のもの・一人二首以内
応募料　一首につき五百円
要領　原稿用紙に楷書で縦書き
宛先　福崎町文化センター内　文化協会事務局　宛
締切　令和二年六月三十日（火）

山桃忌奉賛 第三十五回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に山桃忌が行われています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

日時　令和二年八月八日（土）
場所　福崎町文化センター
主催　福崎町文化協会・福崎短歌会

＊表紙の写真＊

表紙の絵は、松岡映丘作「浦の島子」の画稿で、福崎町立柳田國男・松岡家記念館に所蔵されています。浦の島子とは、昔話でよく知られた主人公、浦島太郎のことです。浦島太郎と呼ばれるのは室町時代、御伽草子に登場してからで、それ以前は浦の島子と呼ばれていました。

この絵は、松岡映丘が明治三十七年（一九〇四）に東京美術学校日本画科を首席で卒業した際の、卒業制作です。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十六号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。